市民参加型演劇　楽劇長崎平和楽の顛末記
～　キーワードは、市民参加　～

Citizen participation type Drama GAKUGEKI NAGASAKI HEIWARAKU WRESTLING IN CHINA (Tojin Zumo)

浜　民夫
HAMA, Tamio

Abstract

This record is the detailed account record of 40 civilians who participated in GAKUGEKI NAGASAKI HEIWARAKU which was staged on Saturday on December 12nd, 1998.

It is the detailed account record of "the citizen participation type" drama which spells the thought of the citizen to have repeated a practice on the half year from the hot day in August to the day of the winter in December to and it was appeared on.

The starring is human national treasure Manzo Nomura at the Nomura house of Kyogen and Mannojo Nomura of the son.

It is big spectacle which incorporated a lot of tradition entertainments of NAGASAKI into "TOJIN ZUMO (WRESTLING IN CHINA)" which is the classic of Kogen. GAKUGEKI is the drama of the new type which Mannojo Nomura is proposing.

Key Word is citizen participation.

The sponsorship of the drama this time is NAGASAKI KONJAKU MONOGATARI execution committee.

The chairman is Koichi Matuda, the vice-chairman is Sayako Hirahara, the secretary-general is Tamio Hama and the secretariat sub director is Nobuo Wakiyama, Hiromi Ota.

Including the other member of the committee, all the members were the cooperation which depends on the volunteer.

As for this execution committee, too, as for the management of the member of the committee and so on, it writes down in the record beforehand for the rearward live reference about the selection of him about the organization of the organization.

In case of holding of GAKUGEKI this time, it is the one which thanks this place for having cooperation from a lot of persons thick.

第1部　はじめに
－楽劇長崎今昔物語実行委員会－

1．経緯

長崎の歴史、伝統、文化は、言うまでもなく素晴らしいものが多い。

1571年の長崎港の開港以来、430年の長い歴史の経過の中で、市民の日常生活の中に溶け込んでいるものも多く見られる。

しかし、一方では継承されずに消え去りあるいは記録に残らないままに消え去る運命にあるものも

多いと想像される。

「よか研究会」（名誉会長　松田皜一）さん，以下，「松田」と敬称を略する）は、長崎の歴史、伝統芸能、文化などを勉強する会であるが、長崎の文化遺産は貴重な物が多く、是非とも後生に残すべきであり、保存すべきものであるとの想いを例会を重ねる度に強くしているのである。

後に述べるように、今回の公演は、そうしたこともあって、市民、県民の手で創ろうと言うことと、「長崎のもの、長崎らしいもの」を舞台の中で取り上げて欲しいとの想いが、野村万蔵さん、野村万之丞さんらの野村家と松田実行委員会会長や平原さや子さん（実行委員会副会長）とで一致したことが、今回の長崎公演のそもそもの発端ということになる。

平成10年３月20日に、長崎自動車の松田会長から会長室にお越し願いたい、ということで、出向いたところ「楽劇長崎今昔物語」実行委員会事務局をやってくれませんか、と松田会長は次ぎのように述べられた。

「長崎の面白さは、いろいろな異国文化がチャンポンのように混ざり合っていて、日常生活の中に息づいていることだと思います。

ポルトガル、オランダ、朝鮮そして中国の文化が上手く溶け込んで、長崎の歴史や文化そして伝統芸能があるわけです。

とりわけ距離的にも近い中国との関係は、ご案内のとおり深いものがあります。

鎌倉時代の和冦や元寇、室町時代に入って王直が五島経由で平戸に渡来する、長崎港の開港後は唐船往来し貿易が盛んになり、長崎に中国の名僧が来て中国寺が建立されるなど、中国・福建経由での交流はいっそう盛んになったことは想像に難くないことですね。今回の公演には、実は随所に長崎の歴史文化財産が登場してくることになります。

「長崎見物左衛門」は古典狂言である「見物左右衛門」をベースにしたお楽しみの作品になるでしょう。人間国宝第七世野村万蔵さんの素晴らしい一人芝居です。

万蔵さんの至藝の極地の名演技に魅せられるものと思います。

舞台には、長崎の昔と今が現れます。また、キリシタン聖歌やお坊さんの声明の声、唐子の踊りなども楽しめます。

「長崎平和楽」は古典狂言である「唐人相撲」を、野村万之丞さんが提唱している楽劇化したものです。唐人相撲は中国との交流が盛んに行われ始めた室町時代に創作されたものと思われます。

長崎に息づいている龍踊り、獅子踊りそして今甦ったランタンフェスティバルなど中国の文化、芸能などが新たに取り入れられます。私たちは中国雑技団の妙技にしばしば見とれて腹の底から笑い楽しみますよね。

相撲の決まり手はよく四十八手といわれますが、長崎平和楽のアクロバット的な取り口や滑稽さを、大いに長崎市民に楽しんで頂きたいのです。」

こうして、よか研究会の常任幹事である浜（実行委員会事務局長）、よか研究会会員で長崎総合科学大学教授の脇山信雄氏（実行委員会事務局次長）、よか研究会事務局長で（有）太田広美事務所代表の太田広美氏（実行委員会事務局次長）が事務局を担当することになったのである。

勿論、実行委員会会長は、当初からの仕掛け人である松田皜一という布陣であった。

副会長は平原さや子さんであった。

２．実行委員会の一年

今回の公演の組織作りや実際の活動などなどについて、まず、その実際と経過を記録として取り纏めておこう。

一年に渡った主なスケジュールは次のとおりであった。

①10／３／20（金）	第１回幹事会；松田会長から楽劇主催に関して事務局担当の要請を受ける；長崎自動車会長室
②10／３／27（金）	万之丞から今回の楽劇の構想について考えを聞かされる（資料ＮＯ１）；会楽園
③10／４／４（土）	第２回幹事会；基本事項検討；長崎自動車会長室
④10／４／22（水）	第３回幹事会；組織、体制など検討（資料ＮＯ２）長崎自動車会長室
⑤10／５／６（水）	第４回幹事会；新聞発表資料、ポスター、チラシ、チ

ケット検討
（資料ＮＯ３）長崎自動車会長室

⑥10／５／13（水）　第５回幹事会；実行委員会委員候補、チケットの検討
長崎自動車会長室

⑦10／５／20（水）　第６回幹事会；会則、予算書、一般参加者の公募の検討
長崎自動車会長室

⑧10／５／23（土）　第７回幹事会；チケットの種類・価格、稽古会場の確保、組織図、
事務局ＴＥＬ・ＦＡＸ、事務員等採用の検討
長崎自動車会長室

⑨10／５／27（水）　「６月10日の楽劇長崎今昔物語に関する記者会見」発表
新聞発表資料ＮＯ１；商工会議所「経済記者クラブ」

⑩10／６／３（水）　第８回幹事会；予算書、チラシ、後援依頼、市民参加募集要項等の検討；長崎自動車会長室

⑪10／６／10（水）　楽劇長崎今昔物語実行委員会総会；委員紹介、
松田会長から各実行委員に委嘱状を交付
実行委員会会則（資料ＮＯ４）、組織図（資料ＮＯ５）、一般市民参加募集要項（資料ＮＯ６）、新聞発表用資料
記者会見；野村万之丞、松田会長
長崎商工会議所会議室

⑫10／７／３（金）　第９回実行委員会幹事会；チケットのデザイン及び価格、ポスターの決定
長崎自動車会長室

⑬10／７／６（月）　大村工業高校に団体出演の要請する

⑭10／７／14（火）　第10回実行委員会幹事会；一般参加の応募状況、チケットの販売戦略の検討
長崎自動車会長室

⑮10／７／16（木）　楽劇長崎今昔物語に関する新聞発表（新聞発表資料ＮＯ２）；
野村万之丞と松田会長との対談、一般参加者のオーディション

⑯10／７／20（月）　一般参加者オーディション説明会、参加者誓約書（資料ＮＯ７）稽古日程説明（資料ＮＯ８）；ＮＢＣホール
実行委員と野村万之丞、史高さんらとの顔合わせ；会楽園

⑰10／７／22（水）　第11回実行委員会幹事会；ＰＲ方法の検討等

⑱10／７／28（火）　チケット発売開始

⑲10／８／16（日）　本日より一般参加者や大村工業高校体操部の稽古が始まる
12月の本番まで
指導は東京のアクト・ジャパンと福岡の野村史高さん
　○一般参加者の稽古；長崎自動車城山記念館
　○大村工業高校の稽古；大村工業高校８／15

⑳10／９／19（土）　第12回実行委員会幹事会；チケット販売状況、ＰＲ対策

㉑10／11／18（水）　一般参加者の公開練習に関する新聞発表
（新聞発表資料ＮＯ３）

㉒10／11／21（土）　第13回実行委員会幹事会；チケットの販売状況、ＰＲ、プログラム
　の原稿、本番当日の手伝い要員等の検討

㉓10／12／５（土）　第14回実行委員会幹事会；チケット販売状況、本番までの最終チェック

㉔10／12／９（水）　公演に関する新聞発表（新聞発表資料ＮＯ４）

㉕10／12／10（木）　万之丞　長崎に来る、総稽

古

㉖10／12／11（金）　万蔵　長崎に来る、総稽古

㉗10／12／12（土）　午前；リハーサル、午後；本番

㉘11／1／9（土）　第15回実行委員会幹事会；実行委員会総会準備
長崎自動車会長室

㉙11／2／1（月）　楽劇長崎今昔物語実行委員会総会；解散式

なお、プロを除く、一般参加の人たち、団体参加の人たち、そして実行委員会の事務局や委員の人たちなど、今回の公演に関わった大勢の人たちは、この間、本業と実行委員会の仕事をこなしながらの手弁当でのボランティア参加、協力であったことをここに書き残しておきたい。

第2部　楽劇長崎今昔物語のあらまし

平成10年12月12日（土）に、長崎市のブリックホールに於いて、「楽劇長崎今昔物語」が公演された。
演目は、狂言の「見物左衛門」をベースにした「長崎見物」と「唐人相撲」をベースにした「長崎平和楽」の二本であった。
いずれも和泉流狂言の野村家が力を入れた作品で、五世野村万之丞（以下「万之丞」と敬称を略する）の作、総合監督による演目であった。
主演は人間国宝・七世野村万蔵（以下「万蔵」と敬称を略する）、万之丞らであり、
2千人収容の大ホールはほぼ満席で、土曜日の午後のひとときを観客は心ゆくまで絢爛豪華な舞台を十分に楽しむことが出来たのではと推察される。
楽劇長崎平和楽は、狂言の古典である「唐人相撲」を、万之丞が提唱している「楽劇」化したものである。もっとも相撲と言っても、日本の大相撲やモンゴルのような相撲とは異なり、中国の皇帝に従う家来の唐人たちと、日本の相撲取りとの相撲の取り口が軽妙でかつアクロバット的で豪快で面白いのである。
本来、御前試合なので、負けては面目がないのであるが、その負けっぷりが可笑しいのである。日本人の相撲取りに投げられる役の大勢の唐人がある意味では主役になるのである。
勿論、ポイント、ポイントはプロの狂言師たちが演じて全体を引き締めるが、団体参加で出演することになった、福岡大学体操部の4名の選手や長崎県立大村工業高校の体操部の12名の選手達のアクロバット的な相撲の演技も、目を見張らせるような素晴らしいものであった。
さらには、舞台を艶やかに飾ったのは、長崎では良く知られている、お馴染みの十善寺龍踊会の21名による龍踊りであり、長崎僑友会の9名による獅子踊りであった。
華麗なそして力強い踊りは、ギャラリーを十分に堪能させることができた。

一．長崎見物

出演　人間国宝　野村万蔵

江戸に住む　見物左衛門（野村万蔵）がふと長崎見物を思い立ちはるばると　旅をして長崎に着きました。
さて　何から見て廻ろうかと　思案する暇もなく　江戸では聞いたこともない異人の歌訳も分からぬ声明の声 …… 道行く人を眺めると町の衆に混って　背の高い赤毛　金髪の異形の人　あ々これが話に聞いた紅毛人か　あれあれ面だちは吾等と同じながら　着てござる衣装は　はて心得ぬ其処へ賑やかな三味線の音楽にのって　唐子達登場　愛らしくコミカルに”うかれ唐人”の踊りなど繰りひろげます　他にもいろいろ ……

日本の中で異色の存在である、この港町長崎の今・昔を、目にも耳にも美しく楽しく再現したいと色々工夫されております。　見物左衛門という狂言は、江戸中期に、加賀藩主の命により、お抱えの 野村家で作られた一人狂言として、今日に至りました。これを万之丞が、現代の長崎市民に通じる様に、狂言の枠をはずして創作・演出したものです。

二．楽劇 唐人相撲

皇帝　野村万蔵
相撲取　野村万之丞
通詞　野村史高
旗振　野村良介

中國に滞在中の　日本の相撲取りが　帰國を願い出るため　皇帝の行幸を待ち受けます。其処へ大勢の供を従え　鳴り物入りで皇帝が登場し玉座に着きます。通詞が相撲取りの帰国願いを取り次ぎ　皇帝はこれを許しますが
名残に今一度相撲が見たいと所望します。通詞が行事をつとめ　供の唐人達が次々に日本人と相撲を取りますが 全員なぎ倒されてしまいます。
最後は遂に　皇帝みずから相手になることになりました。
唐人達の歌と楽の囃子に合わせて身拵えをします。いざ　取り組もうとして　玉体に直接触れさせては汚らわしいと　また楽の囃子で舞いながら荒菰を体に巻きつけます。髭かき棒で皇帝の大髭を菰の外に出すなど　大騒ぎ
さて　いよいよ取り組みとなりますが ……

唐人の歌は、楽劇の中の目玉でもあり、全員で歌います。この唐人相撲こそ、長崎のご当地のものです。長崎が正式に開港する以前から住みついた唐人さんが歌ったといいます
所要時間　一時間二十分

第３部　一般参加者の軌跡
－よせ集め集団から演劇集団へ－

１．一般参加者

一般参加者は、年齢、職業、住む場所そして生い立ちも異なる。
それぞれ見ず知らずの他人同士が、「楽劇長崎今昔物語」の中の「長崎平和楽」の素唐人役に、50名（最終的に本番に出演したのは36名）の人たちが、一般参加で応募した。どのような経過を辿り、半年という短い期間に、自分たちのコミュニティを創りあげていったのか、どのように結束していったのか、を記録するものである。
現代社会は、高度に分業化、効率化を進めてきていて、長崎でも核家族化が一段と進行して、「社会人間」で有る前に「会社人間」であることが多いと想像される。
労働者は会社や職場にしか、あるいは学生は学校にしか、コミュニティを形成することができない。地域社会や人間同士の関係が希薄になっている中で、どのようにして、どのような経過を辿りながらコミュニティが形成されていったのか、を分析をしておくものである。
また、集団としての演技や相撲の面白さを演じたのは、実は一般参加のオーディションを受けて出演することになった、長崎市民や長崎県民の人たちであった。
この人たちは、最終的には36名の参加となった。
この一般参加の人たちの半年に渡る足跡を辿ることで、市民参加社会のあり方について考察してみる。彼らの汗と涙の半年間の思いでの唐人歌は次のような、唐音のでたらめ唐人歌であった。

【唐人歌】
ワンスイワンスイ
バダバラピエカイチンチン
ロツォロツォモニュモニュチンプン
プハロチョープーチャンカンプン
チンプンカンプン
（４回繰り返し）

２．一般参加出演者アンケート調査結果

12月12日のブリックホールの感激が記憶から消えて亡くなる前に、一般参加者の想いを記録に残し、今後の市民加型演劇を行う場合の参考にしたい。
また、コミニュティの形成過程について、まず単純集計の結果をみることとする。
調査の回答者は一般参加者と、幼児に付き添って幼児と一体的に参加していただいた保護者である。
回答総数は41名である。

①　一般参加者のフェースシートについて
女性が三分の二、年齢は30代から40代層が多く、職業では会社員、公務員で四割を占めている。

第１表　性別
（Ｑ１；質問１を表し、その回答結果である。以下同じ。）

回答総数	１００．０
①男性	３４．１
②女性	６５．９

第2表　年齢

（Q2）

回答総数	100.0
①10才未満	9.8
②10代	9.8
③20代	19.5
④30代	22.0
⑤40代	22.0
⑥50代	12.2
⑦60代	4.9

第3表　職業

（Q3）

回答総数	100.0
①会社員	31.7
②公務員	7.3
③自営業	4.9
④無職	14.6
⑤専業主婦	14.6
⑥学生	4.9
⑦小学生以下	14.6
⑧その他	7.3

② 稽古場への通い方について

平日の稽古は午後6時から開始ということで、「自宅」から通うが6割と多かった。

「職場」から直行は3割強であった。また、所要時間は「30分以内」が過半に近く、比較的稽古場に通うことに恵まれた環境の参加者が多かったと考えられる。

第4表　城山の稽古場には何処から

（Q4）

回答総数	100.0
①職場	34.2
②学校	0.0
③自宅	58.5
④その他	7.3

第5表　稽古場までの所要時間

（Q5）

①回答総数	100.0
②1時間30分以上	4.9
③1時間以上	12.2
④45分以上	9.8
④30分以上	24.4
⑤30分未満	48.8

③ 周囲の理解度について

職場や学校そして家族の「理解があった」とする参加者が95%も占めており、周囲の理解不足から参加が難しかったとする参加者は皆無であった。

参加することで最も困難な問題として参加者が挙げたのは、「帰宅時間」のことと「夕食のこと」であった。

第6表　参加することについての職場、学校、家族の理解

（Q7）

回答総数	100.0
①理解があった	95.1
②理解がなかった	0.0
③知らせてなかった	2.4
回答なし	2.4

第7表　参加することについての最も困難な問題

（Q9）

回答総数	100.0
①遅刻のこと	17.0
②職場の残業のこと	14.6
③疲れること	0.0
④周囲の無理解	2.4
⑤帰宅時間	22.0
⑥夕食のこと	22.0
⑦勉強のこと	4.9
⑧その他	2.4

（注）重複回答のため、合計は100%にはなりません。

④ 応募のきっかけ、動機、目的について

公募のことを知ったのは、「新聞」報道とする参加者が過半数を占めて最も多かった。

参加の動機は、「思い出づくり」が最も多く、次いで「演劇が好き」と「人間国宝と共演」が多かった。

第8表　一般参加者の公募のことを何で知ったか

（Q10）

回答総数	100.0
①新聞	51.2

②テレビ	１２．２
③ラジオ	２．４
④友人	１７．０
⑤くちこみ	２２．０
⑥不明	４．９

（注）重複回答のため、合計は１００％にはなりません。

第９表　参加の動機、目的

（Ｑ７）

回答総数	１００．０
①思い出づくり	４８．８
②人間国宝と共演	３４．２
③自分を試す	１４．６
④演劇が好き	３６．６
⑤祭り好き	１２．２

（注）重複回答のため、合計は１００％にはなりません。

⑤　地域やお祭りとのかかわりについて

ご近所とのお付き合いについて、「大切な事と思う」や「付き合っている」とする参加者が多く、コミュニティを大切に考えていることが判明した。

ご近所との付き合いについて「煩わしい」とか「年寄りばかりで」とする参加者が殆どいなかったのは以外であった。

くんちなどの長崎のお祭りへの参加の形態については、「見るだけ」とする参加者が61％と最も多かったが、「積極的に参加」とする者も44％と多かった。

「興味なし」とする者は皆無であった。

第10表　ご近所とのお付合いについて

（Ｑ８）

回答総数	１００．０
①煩わしい	２．４
②年寄りばかりで	０．０
③時間がない	９．８
④付き合っている	４１．５
⑤大切な事と思う	５８．５

（注）重複回答のため、合計は１００％にはなりません。

第11表　くんちなど長崎のお祭りについて

（いくつでもお答え下さい）

（Q18）

回答総数	１００．０
①興味なし	０．０
②見るだけ	６１．０
③積極的に参加	４３．９
④市民の浄財で	９．８
⑤従来の資金集め方法で	０．０

（注）重複回答のため、合計は１００％にはなりません。

⑥　コミュニケーションについて

参加者同士の稽古場でのコミュニケーションについては、「まあまあ良かった」が44％、「良かった」が32％と、両方合わせて76％の参加者が良かったとしている。

「いまいち」であったとする者は10％と少なかった。

語り合える友人が初めてできた時期は、「８月」とする参加者が44％、「９月」が12％と、稽古が始まった時期に既に過半の参加者が初期段階のコミュニケイトが可能となっている。

また、最終的に語り合えるようになった友人数は、「殆どの人」が20％、「３分の２」が10％、「半分」とする者が39.0％であった。

また、「３分の１」とする参加者は27％であった。

第12表　参加者同士の稽古場でのコミュニケーションは、いかがでしたか

（Q16）

回答総数	１００．０
①悪かった	０．０
②いまいちだった	９．８
③ふつう	１２．２
④まあまあ良かった	４３．９
⑤良かった	３１．７
⑥回答なし	２．４

第13表　語り合える最初の友人ができたのはいつ頃でした

（Q11）

回答総数	１００．０
①８月	４３．９
②９月	１２．２

③１０月	２２．０
④１１月	１９．５
⑤１２月	２．４
⑥できなかった	０．０

第14表　最終的にどの程度の人と語り合えるようになったと思いますか

（Q12）

回答総数	１００．０
①殆どの人	１９．５
②３分の２	９．８
③半分	３９．０
④３分の１	２６．８
⑤殆どいない	０．０
⑥回答なし	４．９

⑦　稽古や本番のできについて

稽古は、総括して「楽しかった」とする参加者が93%を占め、逆に「辛かった」者は皆無であった。また、本番のできについても「楽しめた」とする参加者が73%を占めていた。

第15表　稽古は総括して見てどうでしたか

（Q13）

回答総数	１００．０
①辛かった	０．０
②厳しかった	９．８
③楽しかった	９２．７
④つまらなかった	０．０

（注）重複回答のため、合計は１００％にはなりません。

第16表　あなた自身の本番のできは、いかがでしたか

（Q14）

回答総数	１００．０
①あがってしまった	２．４
②無我夢中だった	９．８
③稽古どおりできた	１２．２
④楽しめた	７３．２
⑤回答なし	７．３

（注）重複回答のため、合計は１００％にはなりません。

⑧　楽劇長崎平和楽の評価について

楽劇長崎平和楽の評価については、「大成功」と評価する参加者が56%、「良かった」と評価する参加者が32%と、成功であったとする参加者が９割近くを占めた。

また、再度公募があった場合の対応については、再度、「応募する」とする参加者が49%、「多分応募する」との参加者が24%あった。

このように両者で70%を超えているなど、公募で参加した人たちにとっても、市民参加型の演劇である「楽劇平和楽」が、個人としても楽しく、成功であったと考えられる。

第17表　あなたは、今回の「楽劇長崎平和楽」は成功したと思いますか

（Q15）

回答総数	１００．０
①わからない	２．４
②失敗だった	０．０
③まあまあ良かった	７．３
④良かった	３１．７
⑤大成功	５６．１
⑥回答なし	２．４

第18表　今度、長崎平和楽の一般参加者の公募があったら、いかがしますか

（Q17）

回答総数	１００．０
①応募しない	０．０
②多分応募しない	４．９
③多分応募する	２４．４
④応募する	４８．８
⑤わからない	１９．５
⑥回答なし	２．４

３．　クロス集計分析

①　早めに友人ができた人は、コミュニケーションが、良かったとしている。友人が遅くにできた参加者は、「いまいちだった」としている。

Q16＼Q11		語り合える最初の友人ができた時期					計
		8月	9月	10月	11月	12月	
コミュニケイト	①悪かった	0	0	0	0	0	0
	②いまいちだった	0	0	0	§4	0	4
	③ふつう	3	1	1	0	0	5
	④まあまあ良かった	＊9	＊1	3	4	1	18
	⑤良かった	＊6	＊3	3	1	0	13
	⑥回答なし	0	0	1	0	0	1
	計	18	5	8	9	1	41

(注)＊や§印を、目立つ箇所に付している。以下同じ。

② 当然ながら、今回の公演の過程で多くの友人ができた人ほどコミュニケーションは「まあまあ良かった」、「良かった」としている。

Q16＼Q12		語り合えるようになった友人の割合						計
		①殆どの人	②3分の2	③半分	④3分の1	⑤殆どいない	⑥回答なし	
コミュニケイト	①悪かった	0	0	0	0	0	0	0
	②いまいちだった	0	0	2	§2	0	0	4
	③ふつう	0	0	2	2	0	1	5
	④まあまあ良かった	＊3	＊2	＊8	5	0	0	18
	⑤良かった	＊5	＊2	＊4	1	0	1	13
	⑥回答なし	0	0	0	1	0	0	1
	計	8	4	16	11	0	2	41

③ 稽古場までの所要時間が短い参加者ほどコミュニケーションが「良かった」としている。コミュニケーションの形成が「いまいちだった」としいる参加者は、所要時間が1時間以上かかっている参加者に多い。

時間的余裕があった方のが何かと良かったということであろうか。

Q16＼Q5		稽古場までの所要時間					計
		①1時間半以上	②1時間以上	③45分以上	④30分以上	⑤30分未満	
コミュニケイト	①悪かった	0	0	0	0	0	0
	②いまいちだった	§2	§1	0	1	0	4
	③ふつう	0	1	2	1	1	5
	④まあまあ良かった	0	3	1	＊6	＊8	18
	⑤良かった	0	0	1	＊2	＊10	13
	⑥回答なし	0	0	0	0	1	1
	計	2	5	4	10	20	41

④ 本番を「楽しんだ」人とそうでなかった人とでコミュニケーションの形成に関して違いが生じたであろうか。

結果は、楽しんだ人ほど「良かった」としている。楽しめなかった人に「いまいちだった」とする参加者がいた。

Q16＼Q14		あなた自身の本番のでき		回答なし	計
		楽しめた	楽しめなかった		
コミュニケイト	①悪かった	0	0	0	0
	②いまいちだった	0	§1	0	1
	③ふつう	4	§1	0	5
	④まあまあ良かった	＊13	4	1	18
	⑤良かった	＊10	2	1	13
	⑥回答なし	0	0	1	1
	計	27	8	3	38

⑤ コミュニケーションが「良かった」としている人は、公演も「成功」だったと見ている。なお、因果の方向は双方向と考えられる。

Q16＼Q15		楽劇長崎平和楽は成功したと思いますか						計
		①わからない	②失敗だった	③まあまあ良かった	④良かった	⑤大成功	⑥回答なし	
コミュニケイト	①悪かった	0	0	0	0	0	0	0
	②いまいちだった	0	0	0	3	1	0	4
	③ふつう	0	0	1	2	2	0	5
	④まあまあ良かった	0	0	1	＊6	＊11	0	18
	⑤良かった	1	0	1	＊2	＊8	1	13
	⑥回答なし	0	0	0	0	1	0	1
	計	1	0	3	13	23	1	41

⑥ 楽劇が「大成功」とか「良かった」と考えている人たちは、再度、長崎平和楽の公募があった場合に、再度応募するとしている。

「応募しない」は皆無であった。

Q17＼Q15		楽劇長崎平和楽は成功したと思いますか						計
		①わからない	②失敗だった	③まあまあ良かった	④良かった	⑤大成功	⑥回答なし	
コミュニケイト	①応募しない	0	0	0	0	0	0	0
	②多分応募しない	0	0	0	1	1	0	2
	③多分応募する	0	0	0	＊3	＊7	0	10
	④応募する	0	0	1	＊5	＊13	1	20
	⑤わからない	1	0	2	4	1	0	8
	⑥回答なし	0	0	0	0	1	0	1
	計	1	0	3	13	23	1	41

4．相関分析

一般参加者間のコミュニケーションの取れ具合（Q16)、仲間が出来た時期（Q11)、最終的にできた仲間の割合（Q12)、楽劇平和楽の成功度合いの評価（Q15)、公募があったら再度応募するか否か（Q17）との相関分析をしたところ次のような結果となった。

	Q11	Q12	Q15	Q16	Q17
Q11	1.0000 —				
Q12	0.5245 ＊＊	1.0000 —			
Q15	-0.0489	0.0348	1.0000 —		
Q16	-0.3131 ＊	-0.4563 ＊＊	0.0469	1.0000 —	
Q17	0.582	-0.1320	-0.4018 ＊	0.2397	1.0000 —

（注）Q11；語り合える最初の友人ができたのはいつ頃でした
Q12；最終的にどの程度の人と語り合えるようになったと思いますか
Q15；あなたは、今回の「楽劇長崎平和楽」は成功したと思いますか
Q16；参加者同士の稽古場でのコミュニケーションは、いかがでしたか
Q17；今度、長崎平和楽の一般参加者の公募があったら、いかがしますか
＊；有意度５％で無相関とはいえない
＊＊；有意度１％で無相関とはいえない

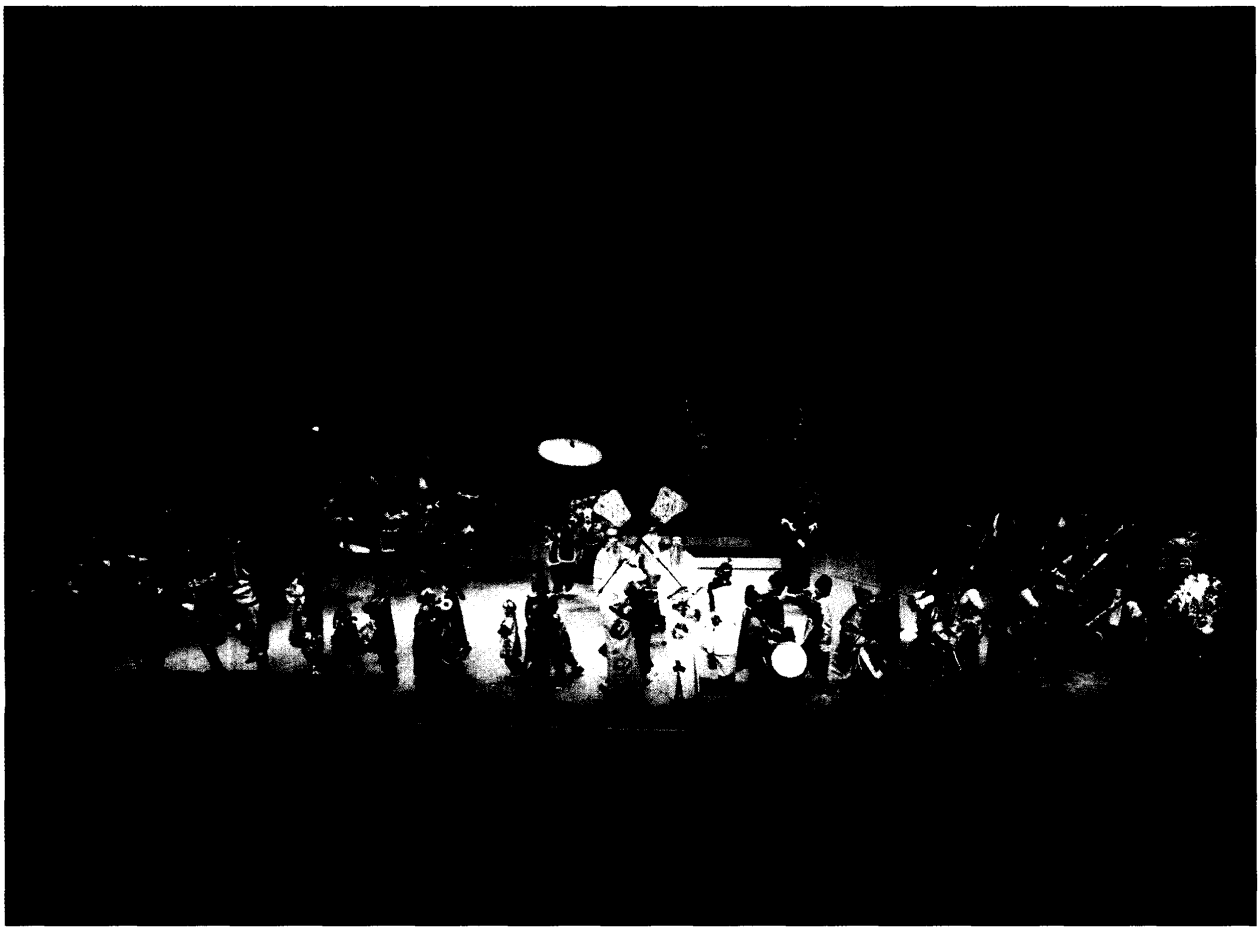
すなわち、Q16とQ12の間、Q12とQ11の間には、１％の間違う確率で相関関係が認められる（無いということができない、以下同じ。）。

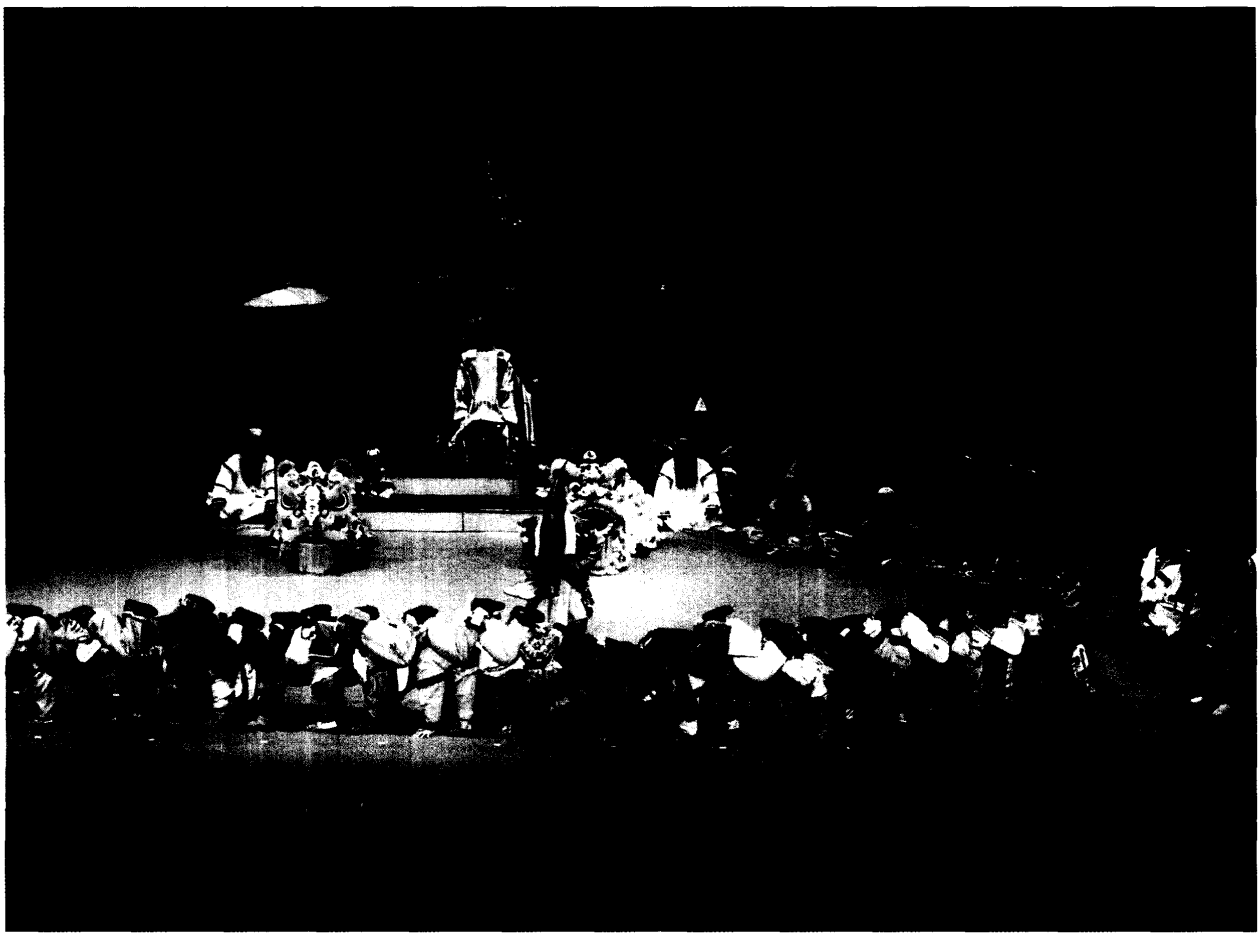
さらには、Q17とQ15の間、Q16Q11の間にも、５％の間違う確率で相関関係が認められた。

この結果から、「コミュニケーション」と「語り合える仲間」の関係には密接な関係があり、話すことから関係が「始まった」と考えられる。

また、「最初の仲間」が早めにできた参加者は、最後には多くの友人ができていることも言える。

「成功」体験はさらに次の「挑戦」に結びついている。





第4部　演劇集団に生まれ変わった一般参加者の体験記

1．Fête（祝祭）と Communication

活水女子大学非常勤講師
松藤　英恵

人が何故演じるのか、などと野暮なことは言うまい。「この世は全て一つの舞台／世の人全ては役者に過ぎぬ（All the world's a stage ／ And all the men and women merely players)」と『お気に召すまま』の登場人物ジェイクィーズに言わしめたのはウィリアム・シェイクスピアであった。[1] しかしそれでもなお、ここに集まっているこの人々が何故に改めて舞台に立ちたがり、何を楽しみに練習を続けるのかという、なにかしら「もやもや」としたものが本番間近の11月末頃まで心の片隅で燻り続けていた。communauté 意識はおろか communication をとることすら、全員がいまだ上手くは見出せずにいた、というのが、その原因である。

そもそも「楽劇」とは楽しいはずのものであるのに、その楽しさが全く実感出来ずにいたということが、最大の悲劇であった。練習とは苦しきものと片付けられる勿れ、その根拠は実は冒頭のシェイクスピアと今回の楽劇と一般市民参加という形態との深い関係に求めることが出来る。

歴史はしばしば見るも美しい程の類似性を我々の前に提示する。今回上演された楽劇は、野村万之丞氏が狂言を総合スペクタクルに発展されたものであったが、日本演劇史に照らし合わせてみれば、最初期の歌舞伎を「狂言」とも呼んだように、物語性を持つ科白劇たる狂言からの影響が、近代芸能の成立と発展に大であったことは否定できない。更にこの楽劇の、狂言には見られないケレン性と祝祭性は遥かに歌舞伎に通ずるものであろう。一方ヨーロッパにはオペラと呼ばれ、同じくその祝祭性、科白音楽劇、ケレン味溢れる舞台装置という点で歌舞伎としばしば比較される近代演劇が存在するが、このオペラもまた、古代ギリシャ演劇に基づく、日本で言えば丁度能に当たるような形態、上演形式を備えたルネッサンス期のテレンティウス演劇に挿入された「幕間狂言（intermède)」と称する演劇が、中世以来の宗教もしくは祝祭行列と、それに付加されていた大掛かりな機械装置即ちケレンを多用したスペクタクルと結びつくことによって発展を遂げたのである。[2] 勿論民衆のための世俗演劇・公衆演劇も誕生したが、それらとて祝祭スペクタクルの影響を免れ得ず、『お気に召すまま』などはその代表的な作品で、今回の楽劇のような煌びやかな舞台衣装に身を包んだ俳優達に演奏歌唱が加わり、時には機械装置も舞台に取り入れられた実に華やかな舞台であった。[3] それだけではない。歌舞伎の芝居小屋とシェイクスピアの劇場の類似性はよく指摘されているが、オペラ誕生よりも、そして歌舞伎誕生よりも遥か以前に、この祝祭性とケレン性を兼ね備えたヨーロッパ演劇スペクタクルは日本に直接もたらされていたのである。当時"戦闘的"演劇集団だったイエズス会宣教師達は信者獲得の為、16世紀から17世紀にかけての60余年に渡って、日本各地で祝祭行列や演劇的スペクタクルを展開した。現在歌舞伎独特のものとされている回転舞台や振り落とし形式の黒幕などは、イエズス会スペクタクルで使用され、或いはその原理が宣教師によって導入され、広められたものに過ぎないし、その起源は更に古代ギリシャ演劇にまで溯る。そもそも、古代ギリシャ・ローマ世界の再現こそが、ルネッサンスと呼ばれたそれでもあったのだ。[4]

イエズス会スペクタクルの人気はたいしたもので(尤も、コレジオで学んだ日本人信者達に、その上演企画のかなりの部分を任せてはいたが)、多くは演劇と宗教祝祭行列が組み合わされたスペクタクルだったが、既に1568年には長崎は大村で上演された聖史劇の為に、わざわざ桟敷形式の観客席のある劇場が造られ、そこには今回のブリックホールの大ホールの客席数2,000を遥かに越える観客が詰め掛けている。[5] 後には大阪や江戸の商人等も多数長崎を訪れて見物しているし、長崎以外でも1567年に、堺で造られたイエズス会演劇用舞台が戦乱によって破壊された記録が残されている。[6] 何より禁教令を出した豊臣秀吉や徳川家康までもがキリシタンを居城に招きそのスペクタクルを楽しんだのだが、まさにその時期に、キリシタンの「舞（まい）」のスペクタクルと同じく、ロザリオをつけた若武者の格好をした阿国歌舞伎が出現し、[7] また、秀吉が好んで上演させたスペクタクルにも今回の楽劇に通ずるものが求められ、万之

丞氏の楽劇もまた、既に野外の祝祭行列を加えた更に大規模なスペクタクルとしても展開されていること、雅楽に始まる日本の古典仮面演劇そのものが、シルクロードを通じて伝えられた古代ギリシャの仮面劇を起源としていることと併せても実に興味深い。因に、天正遣欧使節の一行は、訪問したヨーロッパのほぼ全ての土地で、宗教・世俗を問わず様々な演劇的あるいは祝祭的スペクタクルでもてなされたが、[8] その影響もまた、彼らの帰国後に日本で上演されたスペクタクルに見出せるし、[9] 逆にスペインでは、イエズス会演劇学校出身者にして回転舞台の第一人者であり、当時のスペイン最大の戯曲家たるロペ・デ・ヴェガが、『日本の最初の殉教者』なる戯曲を作り、[10]『1614・5年日本諸国に於ける信仰の勝利』という本も1618年に出版している。[11]

しかし、今回特に重要なのは、ヨーロッパの祝祭スペクタクルが一般市民参加形式であったのは当然だが、日本のキリシタン祝祭スペクタクルにも、信者の参加は勿論のこと、それらのお祭りに参加したくてたまらず、教会周辺や行列の周囲をうろついたあげく、宣教師の思惑通り信者にまでなってしまった参加希望者が数多くいたという点である。[12] 彼等スペクタクルへの自主参加者は禁教令発令直後には、「我々が教えたわけでもないのに」と或る宣教師を感激させている。彼等は自主的に、将来自分達が迎えるであろう悲惨な殉教の様子を仮装や演出で表現しつつ、宗教行列を行っている。[13]

本来、自主的な一般市民参加者とは、かくも自主的且つ積極的であろうと想定されるものである。ましてや、私達はこのような国際的なスペクタクルが展開されていた地に生まれ育ち、それに参加していた人々の子孫でもあろうから、素質は充分にあるはずだ。練習の厳しさ等々はあってもそれを乗り越えて行く楽しさもあろうし、本番の面白さが解るから辛くても離れられないということもあろう。それに耐え切れなければ辞めていく人もあろうが、それとて仕方あるまい。しかし、私達はそこに到達する以前の段階で、即ち、三カ月も一緒に時を過ごしながら、なかなか纏まりや繋がりが、ひいては、一つの目的を目指しているということが見えて来ないもどかしさに、練習開始以来、不安感を持ち続けていたのである。

11月23日の練習の日に、参加者の一人が心臓発作で倒れられるという事件があった。その後、参加者間の会話が漸く弾むように見られたこともあったが、実情は、倒れた方を心配するという共通の話題が出来て、漸く「見ず知らずの他人」に話し掛けられるようになったに過ぎなかった。とはいえ、この事故を機に、お見舞いの寄せ書きを自主的に集め始める等、僅かではあるが、何らかの新しい動きが見え始めもした。この点に関して、倒れた方が、幸いにも奇跡的に恢復された後、この当時の状況を実に印象的に言われている。「一月の舞台写真の申し込みの日に、久し振りに皆さんとお会いした時、結束感が溢れていて、皆さんとても仲良くなっていらしたのには、本当に驚きました。私が倒れる前はそんな雰囲気は全くありませんでしたし、私自身、お名前を存じ上げていたのはお二人だけでしたから」。

何故ここまで communication がとれなかったのか。様々な要因があるが、大きな原因は二つに集約される。

まず第一に、参加者間にかなりの温度差があったということ。一番積極的、とにかく何か面白そう、楽しそうとの期待の下に集まった人々、所謂純然たる市民参加者の中心を成したのが若手女性陣で、話したり昼食を一緒にしたりするグループを最初に作って communication をとり始めたのも、これらの人々であった。他に、野村狂言万の会に参加している人もいて、これらの人々にとっては、常日頃指導を受けている先生方、更にその上の万蔵・万之丞両先生と同じ舞台出御一緒出来るとなれば、その思いも格別なものであったに違いない。その他にも様々な思いを持って参加した方もいたわけで、それぞれの思惑に微妙なズレが存在したのは仕方のないことである。

第二に、指導者と参加者の間の communication が思うようにとれなかった、ということ。一般参加というわけのわからぬ者同士の寄せ集めの場合は、何よりも先ず相互間の communication を図るべきなのだが、8月16日の第1回目の練習日から、型と参加者の台詞の部分のみの練習に終始し、自己紹介等の communication を図る場が設けられなかったし、またやむを得ないことではあったが、練習の度に指導者が替わり、その度毎に communication をとり直さねばならず、質問すらし難い状況の中で、参加者側の混乱を招く結果となった。また、ただでさえ解り難

い「唐音」の片仮名書きの台本の全体を把握することなく、「この台詞を言った後で、一般参加者がこの台詞を言う」という指導中心だったから、この楽劇の本当の面白さが解ったのは、12月6日に万之丞先生の指導を受けてから、という人も少なくない。

7月20日の説明会の時に集まった50数名が、実際の出演者数に絞り込まれたのが11月上旬で、辞退の理由は仕事もしくは健康上のものとなっていたが、それ以降も欠席を繰り返す人から「余りにもつまらないから、もう辞めたい」と告げられ、とにかく何とかしなければ、と指導の先生に頼みに頼んで時間をつくって戴き、現状に対する考えなどを話す機会を設けてもらったのが11月29日、実に第9回目の練習日であった。

この、一種ワークショップの様相をも呈した心情吐露の機会は、素晴らしいものとなった。現状に対する賛否両論も出されたが、何よりもまず、各人の自己表現の場であり、初めて参加者全員がお互いを把握しあった、他者認識の場ともなった。中でも一人の参加者は、以前職場で苛めにあい、極端な人間不信に陥っていたこと、現在は新しい職場に移り環境も変わったが、何より楽劇に参加して様々な人々と出会い、体を動かしながら話をすることで明るく前向きになった、と泣きながら語り、大きな拍手を貰った。余談だが、日本で育った日本人で、身体表現に関わる人には、何らかの形で苛められた経験の持ち主が多い。日本社会に於けるcommunicationと自己表現との問題について、心理学的な側面から調べると面白いかもしれない。もう一点、今回参加の若手女性陣には保母経験者が多く、熟年女性陣には教職経験者が多かったが、これなども面白い傾向だと思う。

それはさておき、この日から参加者の態度はものの見事に一変した。この機会を持って初めて、「参加者全員の名簿を配布しないのはおかしい」という声が上がり始めた。逆に言えば、それ迄は誰も、他の参加者の連絡先すら、何の興味もなかったということになる。漸く名前を知り、顔と一致すると同時に連帯感が生まれ始め、練習の内容はともかく、参加することの面白さに立ち戻れた感があった。その後の練習では、台詞覚えも格段に良くなり、積極的に質問をする場も増えていった。指導者の先生もまた、communicationの必要を感じられたらしく、その後漸く自己紹介の場を設けて下さったが、それが12月6日、11回目の練習日。次の9日の練習日からは万之丞氏が来崎され、最後の仕上げに入るという、本番まで一週間を切った、まさにその日だった。

今回の市民参加は果たして成功だったのか、それとも失敗だったのか。

私は、そして参加者のほぼ全員が、成功だったと信じている。11月29日の劇的な変化から本番まではあっという間で、それ以前とは比べ物にならない程、練習に充足感を味わえたし、確実に連帯感も高まっていったのだから。そして、それは僅か二週間で、文字通りゼロから出発し、本番の成功へ（舞台終了後に楽屋へと引き上げながら、全員が互いに「楽しかった。もう終わりだなんてつまらない」と言った）、そしてその後の打ち上げの席での、これ以上はあるまいと思われる程の盛り上がりへと繋がって言ったのだと思う。そして、この点に於いて、事態を静観しつつ、参加者の自主性に任せて下さった楽劇実行委員の方々と、参加者の願いを入れて話し合いの場を設けて下さった先生方には、本当に心から感謝申し上げたい。

それにしても、没communicationの辛い日々の中、時には不満と重たい胃袋を抱え、足を引きずりながら、それでも練習に参加したあの日々は一体何だったのかと、改めて考えないでもない。舞台終了後、「今一番大事なのは、明日から日常に戻ること」と万之丞氏は言われた。逆に舞台終了後、参加者の中からは、何とかこのcommunautéを存続できないか、という声が上がっている。これはひとまず、「ワンスイの会」として存続させて行くことが、1月23日の第1回同窓会で決定した。

私達にとっては、本番のみならず、他者と出会い、自己を表現する練習時間もまた、非日常のcommunicationの時空であったと言えるだろう。言うなれば、練習の一日一日もまた、私達にとっては、ヨーロッパ中世都市国家の、時には悪夢をも呼び起こした、スペクタクル的祝祭Feteの日々であったに違いない。

＊　＊

ところで、ヨーロッパでは中世以来、市民参加

型演劇が祝祭の度毎に繰り広げられたが、オーバーアマガウの受難劇のように今日まで上演され続けているものの他に、ヴェルサイユ宮殿の宮廷祝祭劇等、現存の歴史的建造物等を利用しての新たな市民参加型演劇の企画・上演による歴史研究の他、地域の文化事業・観光事業の活性化が、幅広く行われ、成功していることも、いま一つの可能性として、付け加えておく。

註：

1) William Shakespeare, As You Like It, Act II, Scene vii.
2) ルネッサンス祝祭演劇史に関しては、KERNODLE, George R., From art to theatre, Chicago, 1943（佐藤正紀訳『ルネサンス劇場の誕生－演劇の図像学』晶文社、1990年）. STRONG, R., Art and Power : Renaissance Festivals 1450-1650, Suffolk, 1986(星 和彦訳『ルネサンスの祝祭－王権と芸術』平凡社、1987年). 歌舞伎に先行する回転舞台と黒幕を備えた舞台装置のうち、現存する最古の再現可能なレオナルド・ダ・ヴィンチの手稿に関しては、PEDRETTI, C., 'Dessins d'une scène, exécutés par Léonard de Vinci pour Charles d'Amboise', ds. Le lieu théâtral à la Renaissance, Paris, 1968, p.25-34. id., Studi Vinciani, Geneve, 1957. PIRROTTA, N. ／ POVOLEDO, E., Music and theatre from Poliziano to Monteverdi, Cambridge, 1982. STEINITZ, K.T., 'A reconstruction of Leonardo da Vinci's revolving stage', in The Art Quarterly, vol.XII, 1949. TISSONI BENNVENUTI, A., L'Orfeo del Poliziano, Padova, 1986.
3) シェイクスピア演劇の舞台に関しては、KERNODLE, op. cit.. YATES, F.A., The Occult Philosophy in the Elizabethan Age, London, 1979(内藤健二訳『魔術的ルネサンス』晶文社、1984／93年). id., Shakespeare's Last Plays－A New Approach, London, 1975(藤田 実訳『シェイクスピア最後の夢』晶文社、1980／89). id., Theatre of the World, London, 1969（藤田 実訳『世界劇場』晶文社、1978／88). The Riverside Shakespeare, 2nd ed., Boaton ／ New York, 1997.
4) Cartas de Japão que escreverao os Padres e Irmãos da Companhia de Jesus. 1598-1614. Jesus. Cartas que os Padres e Irmaãs da Companhia de Jesus escreverao dos Reynos de Japão e China aos da mesma Companhia da India, e Europa, des do anno de 1549 atè o de 1580. Segunda parte das cartas de Japão que escreverao os Padres e Irmãos da Companhia de Jesus(1581-1589).
5) 'Carta de hum homẽ Portugues, cujo nome se não sabe pera os padres, e Irmãos da Companhia de Iesus de Porttugual, de Iapão aos quinze de Agosto de 1569.' in Jesus. Cartas que os Padres e Irmãos, 1549-1580., p.284-v.
6) 'Carta do P. Luis Froes, do Sacay a oito de Iulho de 1567.' in op. cit., p.244-245.
7) 盛田嘉徳著『中世賤民と雑芸能の研究』雄山閣、1994年、pp.267-356。
8) FROIS, L., Embaixadores－Tratado dos Embaixadores Japoes que forãs de Japão à Roma no Anno de 1582.－La Première Ambassade des Japon en Europe 1582-1592., Tokyo, 1942(ルイス・フロイス著、岡本良知訳註『九州三侯遣欧使節行記』東洋堂、1942年。結城了悟著『新史料　天正少年使節－1590年-1990年－』南窓社、1990年。ルネッサンス劇場の頂点であり、イエズス会演劇とも関係が深く、使節一行の歓迎式典が行われ、その壁画が残るヴィチェンツァのテアトロ・オリンピコに関しては、KERNODLE, op. cit., pp167.
9) Cartas de Japão. 1598-1614.
10) Lope de Vega, La Famosa Comedia de los Primeros Martiris del Japon.
11) id., Triunto de la Fée en los Reynos del Iapon por los anos 1614 y 1615., Madrid, 1618.
12) Cartas de Japão.
13) Cartas de Japão., 1614.

（九州大学文学部史学科卒・ソルボンヌ大学院西洋文化史科DFAP終了・西洋文化史・ルネッサンス文化専攻）

2．私の「楽劇・長崎今昔物語」挿話

平下　圭子

☆七世野村万蔵師

1998年12月12日、朝日を背に和服姿の万蔵先生のシルエットが浮かび上がった。なんとおひとりだけでのお着きだった。

ブリックホール玄関横のエレベーターは緩やかで、

「何階でしょうか？」そっとお聞きすると、

『たしか2階です。』とのこと、私も２階のリハーサル室まで。何という幸せ。でも心は焦った。(黙っていてはいけない。何かお話しなくては。)考えもまとまらないままエレベーターのボタンを見ながら口を切る。

「昨年の夏の《耳なし芳一》の朗読会は感動いたしました。」

『いやぁ、あのときはもう・・・・。』

「あの折、平原さんに感想文の替わりに書いてお出しした、つたない俳句のいくつかを、そのままコピーしてお送りしてあるとうかがってびっくりいたしました。送られるのでしたら、少しはていねいにお書きしたのにと、恥ずかしく思っておりました。」一気にお話しする。そして、

『昨夜は遅くまで平原さんと語り合いました。』とのお言葉。その時エレベーターは２階に着く。リハーサル室までの廊下は人影もなく長い。私はもう、できるだけお話しようと思っていた。

「先代の万蔵さんが、人間国宝になられた時の公演を拝見しました。あの時初舞台のかわいい子猿と、六世万蔵さんの、もう70歳になっていらっしゃるのに、くるっくるっと跳び上がって回られたのには、目を見張ってしまいました。」

『あの時は、たしか市民会館でしたか？』

「いいえ、公会堂でした。」それにしても地方の小さな劇場のことまできちんと頭におかれていることに、私は驚く。

やがて長い廊下の曲がり角にさしかかり、そこには何人もの人が準備に立ち働いていて、「おはようございます。」と口々にあいさつが出て、万蔵先生と私の二人の時は終わった。

万蔵先生の楽屋は１階ということで、すぐそばのエレベーターで降りて行かれた。

あの時の初舞台での子猿が、万之丞さんだとしたら、なんとドラマティックなことだろう。

☆野村万之丞師

12月10日。いよいよ本番へ向けての追い込み練習。万之丞師が見える。話術もすっきりとしてわかりやすい。〝美しい日常を〟〝伝統をだいじにしながら変えていってこそ文化である〟など、比喩を用いて、飽きることのない理論で話が続き、やがて稽古に入る。

今までの積み上げとは異なったやり方で、変更・省略も多く、今になってこんなに変わってしまっていいのかしら、と思えるほどである。しかも、これまでの大先生であった野村史高師、橋本勝利さんは叱られっぱなし。今倉正司さんも大緊張である。長崎勢は、この練習でびっくりし、今までのやり方に同情的な態度を示す。史高さん、橋本さんはこてんこてんにけなされる。いかに身内とはいえ、長崎弁で言うところの「ちゃっちゃ、くさら」で、あまりのこきおろしに気の毒にさえなる。しかし、さすがはプロ、平静に、ひとくぎりの初めからやり直される熱意には、私たちは声も出せない。ただ私たち一般人には、ことば優しく、しかし、歩き方・身の動き・声の出し方などは厳しく指導がなされた。

これまでの流れが大きく省略されたりしながらも、練習は密度高く続いた。

やがて練習は終わり、暖冬とはいえ12月の夜は衿をかき合わせなくてはならない。ふと見ると10歩ほど先を万之丞さんと、大きな鞄を手に、舞台監督の伊藤氏が足早に歩いておられる。と、赤信号の横断歩道をお二人は走って行かれた。つい私も「やるまいぞ、やるまいぞ」と続こうと思ったが、「まず待て、まず待て」と、こちら側に立つ。お二人と丁度、向き合った形になり、私は思わず、「ありがとうございました。」とお辞儀をする。「ごくろうさまでした。」と大きいはっきりした声が聞こえ、やがて近づいてきたタクシーに乗り込まれる。そして、わざわざ窓を小開けにして、「では、またあした。」とこれも大きな声で手を振ってくださった。

☆練習・その周辺

練習は、８月から当日まで、初めは月に１～２度、それから週に１度、さらに週に２回、そして12月に入ってからの幾日かは毎日。ほとんど時間

どおりに始められた。

柔軟体操からはじまり、〝脱日常〟を念頭において口音楽に合わせての行進、農耕民族特有という足の上げ下げ、すわり方、背を伸ばすこと、胡座の仕方、立ち上がり方。小身と大振り、少ない動きで大きい効果など、さすがは伝統に支えられた動きなのだと納得がいく。

当然厳しい指導であった。無理な要求はなかったが、しっかりとできるまで、繰り返し練習が続いた。特に毎回指導の野村史高師、橋本勝利さん、今倉正司さん、ともに常に張り切って自信に満ちた大きな声でわかりやすく指導してくださった。指導くださるご自身がよく勉強しておられ、十分な実力の持ち主であるということは、受ける側も、こんなにも安心して十分に受け取ることができるということで、厳しさも非常に満足できるものであった。一流人の持つ厳しさは快かった。一流人と同線上に存在することの充実感、兼好法師が《上手と交われ》と言った言葉を実感する。練習の帰途は、常に満足感があった。

休憩時間もきちんと取られ、若い人たちと笑い合うのも楽しかった。小さい子たちは、もちろん可愛く走り回り、若者は、意欲に満ちた機敏な動きで頼もしかった。

もう一つ練習の大きな楽しみは、大村工業高校体操部の大わざを目の前で見ることができることだった。私など特にこれから、一生することも、できることもなく死んでいくであろう大わざ、宙返り・バック転・片手側転など、息を飲んで見ていた。これは私にとって、練習時の大きな楽しみだった。ある日、部員のひとりの少年と電車で話しながら帰ったことも、今はなつかしい。

☆応募の動機

11月終わりから12月初めにかけて、急に耳そばで慌ただしく聞こえだしたのは、「最年長」「最年長」という言葉であった。4歳から64歳 という触れ込みだったので、私はそれを自分のこととは思っていなかった。それなのに「最年長」という言葉は私に向かって届くのである。私は12月が誕生月なのだが、たとえその時がきても64歳にはまだ遠い。今、そのことは一歩譲っておく。

私はまず「応募の動機」を尋ねられる。単に〝もの好き〟とか〝興味がある〟では、年齢が承知できないのであろう。

それは6月11日付の長崎新聞に端を発する。この日の募集の記事を読んだとき、久しぶりに胸が〝どきん！〟と鳴ったのは事実だった。しかし、年齢•体力を考えたとき、ためらいは大きかった。最初に頭をかすめたのは、何と、35年ほども前に見た、六世万蔵師の舞台であった。

すっと跳び上がってくるりくるりと回る、あの技が思い出された。でも、それは自らすぐに笑いとなった。あれほどの技を素人の60代に要求される筈はないと。

直接の動機は、97年夏、長崎市聖福寺における、万蔵師の「耳なし芳一」の朗読会による。寺の座敷と庭とを開放しての会であった。もちろん、冷房なし、電灯を消した会場には、氷柱がところどころに置かれ、朱蝋燭が立てられ、季節の草花を添えてのすばらしい状況の中、朗読は進められた。その折、万蔵師がおそらく自らが書かれたのであろう紙を繰って読まれているのに私は気づいた。しかも、朗読後のお話の中で、いくつかの訳本を取り揃え、読み比べ、ご自分の感覚にぴったりする一つを選ばれたということであった。それを書き写し、勿論いくたびもの練習のあとの朗読であったのだ。

私はそのことに大いなる感動を覚えた。先代の六世万蔵師から続いた尊敬の念が、ここで更に高まった。

思うにこの朗読会は、万蔵師にとっては、いわば本業ではなく、ワキの仕事・アド・小アドとも言えるのであろうに、この真摯な打ち込み方に、私はこの上なく感激してしまった。これほどの万蔵師と同じ平面上に立てたら、どんなにすばらしいことか。一生のよい思い出となり、私の宝物としよう。一途にそう思ってのことだった。

終わり

3．まぼろしの公演

藤岡　智美

私が最初に「楽劇長崎今昔物語」の公演を知ったのは、ある新聞の記事でした。そこには市民参加者の募集と書かれていました。１９９８年の６月だったでしょうか。私は夫の転勤で４月に長崎に来たばかりでしたが、生活も落ち着いて何か始めたいなと思っていたときだったので、早速応募しました。今昔物語は長崎をテーマにしたものと

いうことでしたので、自分が楽しみながらしかも長崎の知識を学ぶことができるならこれはありがたいという気分でした。大学時代に演劇部にいたこともあり、舞台の緊張感がまた味わえるのかというのも楽しみのひとつでした。しかし楽劇とはいったいどんなものなのか知りませんでしたし、今昔物語となると古典なのかもしれないとちょっと不安なところもありました。ただ私はフリーランスのアナウンサーをしていることもあって、言葉や音の響かせ方については人より興味があり、構成演出を野村万之丞氏が担当なさるということで、言葉の使い方や発声の方法なども勉強できるのではと思い参加できるといいなと思っていました。

説明会が開かれた会場で私は驚きました。長崎でほとんど知人などいなかった私ですが、ほんの一月前に仕事を一緒にした伊折さんがいたのです。伊折さんも高校時代の同級生だった山口さんと久しぶりにあったとかでその３人で一緒に座り説明を受けました。はじめに野村万之丞氏が楽劇の説明をされ、別の地で行われた今昔物語のビデオを見せていただいたとき、ちょっと驚きました。狂言のようなものだと思っていた私にとって、カラフルな衣装を身にまとった人たちが、数々のアクロバットを見せ訳の分からない言葉を叫んでいたからです。そして私達はその後ろで歌ったり手を振ったりするひげを付けた唐人の役をするというのです。ゆったりとした流れの中で進んでいく舞台を想像していた私にとってその役どころはあまりにかけ離れていましたが、逆をいえば今まで付けたことのない衣装を着て野村万之丞氏と同じ舞台に立てると思うと楽しくなり、参加することを決めました。

第一回の練習はまだ暑さが厳しい頃でした。初めて降りる電停で、練習の場となる体育館の方向に向かって歩いている人が数人いてちょっと安心しました。この日の練習には野村史高先生がいらっしゃいました。先生には劇の中で私達が歌うことになる唐人歌を教えていただきました。中国語に沿っているところはあるそうなのですが、かなり創作の言葉だそうで、「ワンスイワンスイ」から始まり、最後が「チンプンカンプン」で終わる歌詞は私達にもチンプンカンプンでした。この歌が劇の中の重要なところだということで何度も覚えるまで練習しましたが、この歌の練習で先生の張りのある、体育館にも響き渡る声に感動しました。歌詞のおもしろさよりも、私は先生の、洋楽には無い日本古来からある声の送り方にとても興味を覚えました。一つの音を出すにしても、微妙に低い音から決まった音へと持っていく歌い方や、ちょっとした間の置き方、声量を少しずつ変えながら色でいうところの濃淡をだす音の使い方などとても勉強になりました。また、例えば「か」という音を出すにしても、私達ならただ「か」と一つの音でだしてしまうところを、ローマ字でいうところの「Ｋ」の音つまり子音の音から出して母音の「Ａ」へ持っていくような音の表現がたくさんあり、それで音の表情が出ているのがわかってとても感動しました。さすがにプロフェッショナルは違うというのを痛感した一回目でした。

二回目にいらっしゃった橋本勝利先生は音の表現もさることながら動きのプロでした。バック転なども軽々とやってしまうような方でしたから足の動き一つとっても違います。私達は入場するときの足の運びを教わりました。先生が動くと大変きれいなのですが私達はそのようには動けません。右足をひざが曲がるくらいまであげた後、その足を地面をすって歩くように前にだし、その後左足を横に付けるというものです。簡単なことなのですが、足の上げる角度、足をするときの最初の足の位置、足の運び方、腰の位置、ひいては姿勢まで先生の動きは流れるように前へ進んでいくのですが、私達がやると一つ一つの動きが分裂して行進しているようになってしまうのです。日本古来の伝統芸能の所作の美しさを実感しました。

練習が午前10時から始まる日は、昼食時に少しずつ周囲の人とも話をするようになり、さらに出演者全員で前の人の背中に足をあげて長い列を作る「ムカデ」と呼ばれるアクロバットの練習が始まると並んだ人たちとの息を合わせなければならなくなり、少しずつ参加者の雰囲気もほぐれていった感じでした。

そして私にとって人生で最大の出来事が起こったのは11月22日の七回目の練習の日でした。その日は朝からお天気も良く私は今日も張り切るぞという気持ちで出かけていきました。午前10時から練習が始まり、体育館では橋本先生から「今日から蛇踊りの人も一緒に練習します」という説明がありました。実はそこから私の記憶はありません。私の記憶がはっきりしたのはそれから５日たった

午後のことでした。私は病院のベッドから友人の姿を見て「どうしたの」と聞きました。自分自身がどうしているのか、何故彼女がそこにいたのか全くわかりませんでした。ここから書くことは私の記憶がはっきりしてからお見舞いに来て下さったメンバーの方々や、看病に当たった夫や母から聞いたことです。

その日、私は朝から特に体調が悪いこともなくいつもと変わらない状態でした。午前の練習が始まってからも、私は何があることもなく体を動かし、歌を歌っていました。お昼ご飯は橋本先生とお話をしたり皆さんと記念写真を撮ったり普通の様子でした。

午後の練習が始まって立っていたところ、隣にいた伊折さんに「ちょっと肩を貸して」と倒れかかりました。この日は公開稽古でマスコミも来ていたので、みんなは「緊張したのかしら」「貧血かも」と横に寝かしました。それから約1時間がたった頃、稽古が再開されることになって立ち上がろうとして私は再び倒れました。このときはすっと落ちるように倒れました。私の目が白目になって苦しがってきたのでこれは普通ではないと思い、体育館の外のロビーにあるソファーに運ばれました。そこに、初めてお嬢さんの練習を見学に来ていた内科の先生がいらして、丁度聴診器を持っていたのです。その先生がすぐに見て下さったところ心臓の動きも遅いし脈もほとんどないのですぐに救急車を呼ぶようにと指示されました。そして人工呼吸や心臓マッサージをするようにといわれました。この日から練習に参加していた蛇踊りのメンバーの中に偶然消防署の救急隊員の方が3人いらっしゃり、その方々が交代で人工呼吸や心臓マッサージを続ける一方、先生は家族に連絡して血液型や持病がないかなどの確認をするようにと言われ、参加者の方々が夫に連絡をして下さいました。救急車に移されるときも、その救急隊員の方に状況を説明して下さり、私はそのまま救急病院へ運ばれました。

病院に運ばれたときは脈はなく呼吸も止まり、心臓が細かに痙攣しているだけでした。心臓マッサージや人工呼吸、心臓への電気ショックを続け、電気ショックの3回目で心臓が脈を打つようになりました。

心臓は何とか動き始めたもののいつ停止するかわからず、また倒れてから病院に運ばれるまで時間がかかっているので脳にも障害が出ている可能性があると言うことで、しばらくは危ない状態でした。担当の医師は、夫に多分回復しても植物人間状態、良くて幼稚園児程度の能力でしょうと言っていたようです。

しかし2日後の24日から少しずつしゃべることができるようになり、夫や母の名前などもわかるようになりました。その後心臓の状態も安定し、お見舞いに来た人ともゆっくりではあるものの会話をしました。そして5日後の27日の午後にやっと私自身の記憶が戻ったのです。

その後、私は医師が驚くほどの回復をしました。脳の方は最初に考えられていたよりも血液が行かなくなった時間が短かかったようで障害はなく、また心臓も最初の40%から80%まで動き始めてかなりの早さで回復していきました。医師の話では倒れた直後の救急処置が良かったからだと言うことで、練習場に内科の先生と救急隊員の方がいらっしゃったことが本当に幸いしたようです。そして心臓の検査結果も良好で、12月18日に、入院から1月もたたないうちに退院することができ自宅でお正月を過ごすことができました。

入院期間中には、橋本先生が練習があるたびにお見舞いに来てくださいました。各地で市民参加の舞台をされているようなのですが、参加者が救急車で運ばれるといったようなことは初めてで、しかも先生にとってはこの日から参加者の気持ちを引き締めようと少しハードな練習を始めたそうで、そういったことから責任を感じていらっしゃるようでした。しかし先生から練習状況や劇の進行具合を伺うのがとても楽しみで、病院の中で私も皆さんと一緒に練習しているかのような気持ちになっていました。そういえば私がまだ記憶がなかった頃、私は「ワンスイワンスイ」と唐人歌を歌っていたそうです。その時は母は何の歌なのかわからなかったのですが、公演を見てこの歌だったのかとわかったと言っていました。

たくさんの市民参加の方や実行委員会の方がお見舞いに来てくださいました。ほとんど一度くらいしかお話をしたことがない方々でしたがとても心配してくださり、練習で毎回橋本先生が私の状態を説明していて、回復に向かっていると聞いてみんな安心していると教えてくださいました。ほんの数回一緒にいた方々とこんなに親しくなれるなんてと本当にうれしく思いました。

公演が終わってから、公演の全てを納めたＶＴＲや練習からずっと追っかけていたテレビ番組の放送を見て、再び感動しました。何も知らなかった私達が大きなホールに立って完璧な演技ができるようになるなんて、皆さんが努力され、練習の中でみんなが一つになっていったんだなあと痛感しました。心配していたムカデもうまくできていて会場からの拍手も盛大なもので「楽劇長崎今昔物語」の大成功を本当にうれしく思いました。公演のパンフレットやＶＴＲの市民参加のメンバーの中に、私の名前を入れてくださった実行委員会の皆様のご厚意にも感激いたしました。ただ一つ、私も同じステージで感動を味わえなかったと言うのが心残りです。

公演後、せっかく一つになったメンバーなので、今後も何かやっていきましょうということで、「ワンスイの会」が発足しました。私もそのメンバーに入れていただいています。長崎でできた新しいつながりをこれからも大切にしていきたいと思っています。転勤族で各地を回る私にとって、長崎は忘れることのできない街になりました。

第５部　おわりに

見知らぬ者たちが、オーディションを受けるためにＮＢＣビデオホールに、７月のある日、県内のあちらこちらから集まり、「1998年12月12日の13：00に長崎ブリックホールの舞台に立つ」という、たった一つの共通の目的のために、それから半年に渡る稽古に明け暮れる生活に入ることとなった。

私生活のみならず公的生活にも多少は支障をきたさせながら、世の中の考えからはほど遠い、無償の実利の無い生活を自ら選択することとなった。

年齢、職業、住む場所、生まれ育った環境、趣味や趣向も異なる寄せ集めの人たちがどのようん経過を辿りながら、仲間を増やし、一つの纏まりのある集団に脱皮していくのか、実行委員会事務局長としては興味を持っていた。

第１回の稽古スタートの日は、８月の暑い日で蝉日暮れの夏の日だった。

長崎自動車記念館には、Ｔシャツ、半ズボンの人たちが大勢いた。

12月の本番の日は、朝９時から本舞台を初めて使ってのリハーサルが行われた。

総監督の野村万之丞さんから、なかなかＯＫが出ずに、12時30分開場、13時開演という時間セットにも関わらず、12時近くまで細かい（しかし大事な）チェックが真剣に行われた。そして、かなり演出や演技の変更が現場の状況に応じて行われた。

半年掛けた稽古の成果も、以外に呆気なく、あっという間に本番の舞台も終わってしまい、その後のサヨナラ・パーティから二次会まで瞬く間に時間が過ぎ去っていったのではないかと思う。

すっかり仲間ができて、ついには年が明けて1999年１月23日には、同窓会が開催されるまでになった。

見ず知らずからスタートし、人間国宝・野村万蔵や野村万之丞と同じ舞台に立つという、大きな事をなし得るまでに成長した。そして、一般参加者達は、会のネイムを、自分たちが苦しいとき楽しいときに歌った唐人歌の一節から取って**「ワンスイの会」**とすることにした。

実行委員会としては、自然発生的に自分たちの力で連帯意識が芽生えてくることを期待して、敢えて仲間づくりの手助けはしないようにした。

お仕着せの組織は、受け身になってしまって機能しない事が多い。

参加者の名簿の配布も、要請があるまで放置しておくことにした。

素唐人役の相撲取りを長崎市民の中から公募で募集するという今回の「実験」は、都市化、核家族化が着実に進んでいる長崎において、「演劇」を核にしたコミュニティの形成が可能なのであろうか。

当初の応募者説明会には、50名を超える市民が参集したが、アクロバット的な演技が多々あるので、可能なら男性の参加も期待していたが、実際には男性が少なく女性が非常に多かった。男性は、会社や職場のことが精一杯で、社会活動や地域活動への参加はこの分野でも少ないのであろうか。

しかし、実験は先に述べたように全体としては成功したと判断できる。

第４部の一般参加者達の論文にも活き活きとした半年間の経過やコミュニティ形成過程が現われている。ワンスイの会ができるまでに成った。

実行委員会組織も、基本方針の下に別資料にあるように、具体的な行動計画を立てて、1998年12月12日の公演の日に向けて、委員相互間の連携や

東京のアクトジャパンやコースケ事務所（いずれも野村万之丞さんが代表）との連携を密にしながら推進してきた。

マスコミにも折に触れ、あるいは節目節目に今回の公演に関する情報を発信し、市民、県民に12月12日に新装オープンしたばかりの「長崎ブリックホール」に足を運び美しい長崎の町を再現した　NAGASAKI　HEIWARAKU　を堪能して頂くように広報をしてきた。

私たち長崎市民の手作りで上演した市民参加型演劇は、2,000人入る大ホールを埋め尽くし、観客として参加した市民、県民の絶賛の中に、様々な成果を残して幕を引き終演となった。皆様のご協力に深く感謝いたします。

なお、一流の出演者をお呼びして、公的機関からの援助を一切受けずに、全くの手作りで上演したにも関わらず、市民、県民のお陰様を持ちまして、財政的には赤字を出すことなく、しかも資料の「実行委員会会則」にあるように、「出島復元事業」に協賛して「出島基金」に剰余金を寄付をすることができたことも併せて報告をして置きたい。

【資料NO１】

長崎公演に関する野村万之丞の構想

平成10年３月27日（金）
12：00～　会楽園
出席（アクトジャパン）
万之丞さん、今倉正司さん
平原さや子さん
（地元）
浜　民夫
脇山信雄
太田広美

市民参加の楽劇「平和楽」（…唐人相撲…）にしたい。

この際、長崎の情緒、香りなどを、楽曲に組み込み込んだものにして、人間の五感に訴え、マルチメディアの総合楽劇にしたい。

１．組織体制について

◎　全体を統括する最高責任者でありプロジューサー…野村万之丞

◎　実行委員長
…松田皜一さん

○組織は５つくらいの部門に分け、それぞれから２名程度の委員を出し、10名程度の実行委員会を作るのが望ましい、と思う。

例えば、次のような５部門が考えられる。

（１）「財界・顧問」……名誉職商工会議所会頭とか、財界のトップとか、……、マスコミの社長とか、市長とか、……、

（２）運営の実行（委員）……万之丞，平原ランタンフェス　１名
よか研究会　　１名

（３）政策の実行（委員）……チケット、ポスター関係（デザイン、持ち込み先）、ＰＲとかマスコミ関係の対応
アクトジャパンから…橋本、中山（経理）
地元　……１～３名

（４）練習の実行（委員）……市民参加者に対する練習指導
インストラクター……アクトジャパン
連絡担当アシスタント……地元のフリーの若手女の子

（５）一般参加の市民……Ａ、Ｂ、Ｃ、Ｄ、Ｅの５つに分類される
Ａ　稽古にフルに参加できる人
Ｂ　本当はフルに稽古に出たいが、間際の１月だけの人
Ｃ　イッチョカミの人…本番の２～３日前から出てくる人
Ｄ　裏方・スタッフをする人
Ｅ　音楽だけで参加する人…三味線とか故弓とか

２．一般参加の募集

（１）六月初めに、市民参加の楽劇「平和楽」の開催及び参加する市民の募集に関しての新聞発表を長崎で、万之丞さんが行う。

（２）長崎市の広報誌などにも掲載して貰う。

（３）応募締め切り…７／10とする。

（４）応募者に対する説明会…７／20（15：30～17：00）
＊この日、ＮＢＣの舞台（13：30～15：00）のために万之丞さんは来崎中。

（５）応募者に10日の余裕を与え、７月末で最終的に参加の諾否を貰い決定する。

（６）応募の申込先と問い合わせ先

3．今後のスケジュール
（1）4～5月
　実行委員会の組織作りと起ち上げ
（2）6月1週～2週頃
　記者発表（万之丞　来崎）
（3）6月～7月
　一般参加者募集
（4）7月20日（月、海の日）
　応募者への説明会（万之丞　来崎）
（5）7月31日　一般参加者の決定
（6）8月～11月　練習・稽古
（7）12月10日　総稽古
（8）12月11日　リハーサル
（9）12月12日　本番
（10）12月12日　本番終了後、簡単な打ち上げを行い、実行委員会を解散する

4．その他
（1）必要なら、4月25日（土）の10時から13時の間は長崎に来れる。
（2）6月22日（月）　長崎に来ることができる（来るようにしたい）
　13時～15時　実行委員会
　15時～　新聞発表

【資料NO2】

「平和楽」打ち合わせ事項
10／4／22
長崎自動車会長室

1．題名；
長崎今昔物語・長崎平和楽？？
○○○○○○実行委員会

2．委嘱状の交付；
○長崎の伝統文化や伝統芸能を取り込んだ舞台になり、これが今後、国の内外で演じられることになる。

○したがって、ある程度の公的性格を持たせられないか？？

○どういう肩書きで発布するか。
○○○○○○実行委員会会長名
又は
長崎国際観光コンベンション協会会長名
又は
長崎伝統芸能振興会会長名
又は
名誉会長である長崎市長名

○何時、何処で委嘱状を交付するのか。

◎仕事を、楽しく、頑張ってやってもらうためには、大事なことか。

3．実行委員会の開催；
◎委員を確定したら、できるだけ早く実行委員会を開催する必要がある。
○6月9日より前が望ましい。
○6月9日にも、野村万之丞さん出席の下で、実行委員会を開催する。

4．その他

【資料NO3】

「平和楽唐人相撲」実行委員会幹事会
第4回打ち合わせ会
10／5／6
長崎自動車会長室

1．確認事項
（1）第5回「平和楽唐人相撲実行委員会幹事会」
　日時　5月23日（土）11：00～
　場所　長崎自動車会長室
（2）第6回「平和楽唐人相撲実行委員会幹事会」
　日時　6月3日（水）11：00～
　場所　長崎自動車会長室
（3）第1回実行委員会総会
　日時　6月9日（火）13：30～14：30
　場所　商工会議所会議室
（4）記者発表
　日時　6月10日（水）午後○○○○○
　場所　商工会議所会議室（確保済み）
　　●経済記者クラブには、未通知
（5）商工会議所の高比良専務理事の概要説明
　日時　4月28日（火）11：00～済み

2．検討事項

（1）「主催者」等の決定について

①新聞発表用の資料、ポスター、チケットなどに明示する必要有り。

②主催者は、「楽劇コースケ事務所」、「万の会」又は「実行委員会」か。

③あるいは、「楽劇コースケ事務所」、「万の会」及び「実行委員会」の共催か。

④後援はどうするか。

⑤決算後に赤字が生じた場合はどう処理するのか。

（2）チケットの価格や受け払いの総管理は「組織のどこで、誰が」行なうか。

①チケットの種類、価格は。

②誰に何枚やり、在庫は何枚か。

③入金があったかどうか。

④エージェントとタイアップした場合のチケットの割引率などはどうするか。

⑤「組織財政委員会」、「庶務運営委員会」又は「平原さん」か。

⑥「組織財政委員会」は、企業や大口の需要家向けのチケットの割り振り担当か。

（3）チケットの種類等について

①指定席にすると、購入者の希望を聞かなければならないので、事務的に煩雑になる。特別席、A席、B席、C席とかが事務的には簡単である。

②指定席にすると、企業で買った席が空いてしまう可能性がある。

（4）東京からの指示や各委員会との連絡事務、公演やチケット内容等に関する
ことなどについての問い合わせ先を用意する必要がないか。

①事務所、専任スタッフ（アルバイト）及び専用の電話回線（ファックスを含む）が必要ではないか。

②平原さんのお宅では大変だと思いますが。

（5）広報用資料の作成

①6月10日の記者発表の申し込みをするための、投げ込み資料が必要。

②長崎市や長崎県発行の広報誌

③その他

（6）委嘱状の準備について

①会長印、名誉会長印の準備

②委嘱状の印刷

③交付式をいつに設定するか。場所は商工会議所とするか。

（7）その他

【資料NO4】

楽劇長崎今昔物語実行委員会会則

（名称）

第1条　本会は、楽劇長崎今昔物語実行委員会（以下、「実行委員会」という。）という。

（目的）

第2条　実行委員会は、長崎の歴史、伝統文化、中国芸能などを、広く国の内外に伝える、野村万之丞総監督の下に上演される「楽劇長崎今昔物語（長崎見物左衛門、楽劇唐人相撲）」を、平成10年12月12日に、長崎市のブリック・ホールにおいて主催して開催し、市民、県民に多いに楽しんでもらうことを目的とする。

2　本実行委員会は、「出島復元事業」に協賛して、この公演を主催するものとする。

3　また、実行委員会の委員は、市民参加型の今回の公演に協賛して、無料奉仕で参加し、開催に関して次の事項について分担して、積極的に取り組むものとする。

①伝統芸能、中国芸能の団体参加又は個人参加に関すること

②長崎の歴史、文化、芸能の説明・解説又は楽器等による教授に関すること

③一般市民参加の公募に関すること

④宣伝、PR及び広報に関すること

⑤チケットの販売促進に関すること

⑥市民参加の人たちの稽古、その他の雑用に関すること

⑦総稽古、リハーサル、本番当日の各種アテンドに関すること

⑧実行委員会全体の円滑な運営に関すること

⑨その他、今回の公演に関して必要なこと

（事業）

第3条　実行委員会は前條の目的を達成するため、次の事業を行う。

楽劇長崎今昔物語（長崎見物左衛門、長崎平和楽）の公演

（構成及び役員）

第4条　実行委員会は、その趣旨に理解と熱意を

もって賛同する諸機関及び団体
と個人をもって構成する。
2　実行委員会に次の役員・委員を置く
略（組織図参照）
（専門委員会委員）
第5条　実行委員会の中に専門委員会を置く。
2　専門委員会の委員長及び委員は会長が指名する。
3　各委員会の組織及び役割分担は、会長が決定する（別添のとおり）。
（会長の職務）
第6条　会長は、本会を代表し、会務を統括する。
2　会長は、実行委員会の運営等に関してアドバイスを求めるために、若干名の評議員を置くことができる。
（任期）
第7条　役員、委員の任期は、事業の終了までとする。
（幹事会）
第8条　事業の具体的な企画・調整を図るため幹事会を組織する。
2　幹事は会長が指名する者を充てる。
（事務局）
第9条　事務局を(株)長崎自動車本社内に置く。
（細則）
第10条　この規約に定めるもののほか、当委員会の運営等について必要な事項は会長が定める。
附則
（施行期日）
1　この会則は、平成10年6月10日から施行する。

【資料NO6】

楽劇長崎今昔物語「長崎平和楽」市民出演者募集要項　(10／6／22)

1．募集条件
①性、年齢は問わないが、健康な人。
②募集人員は25～30名程度。
③長崎近郊に在住で、稽古場、公演会場に通える人。
④交通費は自己負担。
そのほか公演に関する当方との一切の金銭交渉はない。

2．役名　**①素唐人（すとうじん）　1～25名**
②旗持（はたもち）　1名
③髭持（ひげもち）　2名
④傘持（かさもち）　1名

3．内容　①音楽に合わせて入場する
②相撲取りとの押し合い
③唐音（とういん）を話す（でたらめ中国語）
④歌を歌う（でたらめ中国語）
⑤音楽に合わせて退場する
＊アクロバットのできる方は、相撲の場面で、直接、相撲取りと相撲を取る事もあり得る。
但し、オーディションがある。

4．装束　カルサン・帽子・髭・足袋（いずれも貸与）
＊但し、下着として、白のシャツ・ステテコを各自用意する。

5．稽古日程　市内城山町で行うが、日程等は説明会で別途説明する。

6．問い合わせ先
〒850-0842 長崎市新地町3－17
長崎自動車㈱本社内
「楽劇長崎今昔物語」実行委員会事務局
TEL／FAX　095－821－8956

7．応募方法　葉書又はFAXに、お名前（ふりがな）・住所・電話番号・生年月日・性別・足のサイズを明記の上、上記の問い合わせ先まで送る。
締め切り：平成10年7月15日（水）
＊必着のこと。

8．説明会
①日時　7月20日（月、祝）　15：30～17：00
②場所　NBCビデオ・ホール③
長崎市上町1－35
NBCソシアル・ビル3F
＊応募者で出演を希望される方は、必ず出席のこと。

【資料NO7】

誓　約　書

私は、本年12月12日に上演する「長崎ブリックホール開場記念公演『楽劇長崎今昔物語』」に参加するにあたり、出演者・関係者の皆さんと一致協力して

素晴らしい公演とするため、全力を尽くすことをここに誓約いたします。

また、

一、担当指導者の指示を順守し、稽古の無断欠席等で、周囲に迷惑を掛けない事

一、本公演への参加に際して、何等の金銭上の取引も発生しない事

一、稽古、リハーサル、本番等の不慮の事故・怪我については、貴実行委員会に対し、一切の責任・保証を問わない事

以上三つのことを、併せて了承いたします。

「楽劇長崎今昔物語」実行委員会様

平成10年７月20日

お名前＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

ご住所〒＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

ご自宅ＴＥＬ＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

携帯電話＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

生年月日＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

【新聞発表資料ＮＯ１】

楽劇長崎今昔物語に関する記者会見について

平成10年６月２日

1．日時　６月10日（水）15：00～

2．場所　長崎商工会議所会頭室会議室

3．会見者　五世 野村万之丞、松田皜一（楽劇長崎今昔物語実行委員会会長）

4．内容　① **ブリック・ホールのこけら落としの一環として、12月12日に開催する**

人間国宝七世野村万蔵、五世野村万之丞ら出演の、楽劇長崎今昔物語の上演に関する発表（概要別紙）

② **同公演は、長崎市民の参加も求め上演されますが、その一般公募に関する応募要領の発表**

③ 各界からのボランティア参加により、出島復元に協賛して編成された、「実行委員会」組織に関する発表

5．その他　① **第１回**楽劇長崎今昔物語実行委員会が次により開催されます。

○日時　６月10日（水）
13：00～15：00

○場所　長崎商工会議所会頭室会議室

② **６月10日の記者会見に備え、事前に内容の説明や趣旨説明を実施したいと思います。**

希望の社の方は、６月３日の12：30頃に、長崎自動車本社の会長室にお越し下さい。松田実行委員会会長をはじめ関係者が説明します。

6．問い合わせ　長崎自動車本社内
楽劇長崎今昔物語実行委員会事務局
ＴＥＬ／ＦＡＸ　０９５－８２１－８９５６

内容等に関する連絡は次にお願いします。

実行委員会

事務局長　浜　民夫
（長崎大学環境科学部教授）　843-1627

事務次長　脇山信雄
（長崎総合科学大学教授）　838-4123

事務次長　太田広美
（よか研究会事務局長）　847-7107

【新聞発表資料ＮＯ２】

野村万之丞・松田白高一の対談と市民参加者のオーディション　平成10年７月16日

1．楽劇長崎今昔物語

出演；人間国宝 七世野村万蔵、
五世野村万之丞、
ほか長崎市民を含め80名

演目；長崎見物左衛門（仮題）、長崎平和楽が、長崎ブリックホールのこけら落としの一環として、別添チラシのように、12月12日（土）に開催されます。

2．12月の公演に先立ちまして、

◎出演される野村万之丞さんと楽劇長崎今昔物語実行委員会会長の松田皜一
との内容や謂われなどについての対談

◎長崎平和楽の一般市民参加の公募に応募してきた市民（40数名）への
今回公演に関する説明やオーディション

を７月20日に下記のように公開で行いますので、是非、会場にお越し下さい。

３．なお、７月20日は、野村万之丞さんは、別の公演（13：00開場14：40頃終演予定）でＮＢＣビデオホールに来ています。

報道関係の方は、入場できますので、ご来場下さい。

４．また、12月12日の「楽劇長崎今昔物語」のチケットは、７月28日から

別紙チラシの場所で前売りを開始いたします。

記

１．日時　　７月20日（月、祝）14：45頃から

（１）対談　14：45頃～15：15

（２）市民参加者への説明とオーディション　　15：30から

２．場所　　ＮＢＣビデオ・ホール舞台上にて

（別紙の地図を参照）

長崎市城山町１１－２３

ＴＥＬ　８６２－０１６０

３．参加　オーディションによる一般参加者　　４０名

大村工業高校体操部　　１１

十善寺龍踊保存会　　２６

◎チケットの　長崎自動車本社内
楽劇長崎今昔物語実行委員会事務局
問合わせ先
ＴＥＬ／ＦＡＸ　０９５－８２１－８９５６
◎ チケット販売所　浜屋プレイガイド
長崎バス総合サービス・センター
値段　Ｓ席　１２，０００円
（当日売り１３，０００円）
Ａ席　　９，０００円
（当日売り１０，０００円）
Ｂ席　　３，０００円
（　学生　　２，０００円）

【新聞発表資料ＮＯ３】

楽劇長崎今昔物語の公開練習について

平成10年11月18日

長崎ブリックホールのこけら落としの一環として、人間国宝 七世野村万蔵、五世野村万之丞、ほか長崎市民を含め140名が出演する「楽劇長崎今昔物語」が12月12日（土）に開催されます。

今回の公演には、様々な団体のほかに長崎市民や県民などが、一般参加の形で出演しています。本番まで３週間余りとなり、練習にもいよいよ熱が入っています。

そこで練習の成果ををご覧頂くために、一部衣装合わせを兼ねて、下記により公開にて行いたいと思いますので、是非、お越し下さい。

記

１．日時　平成10年11月22日（日）

午後２時～４時

＊当日は、アクロバット的な「相撲」を演じる大村工業高校体操部の選手11名も加えた合同練習を行います。

なお、練習自体は午前10時から行われますが、取材の最適な時間は、合同練習が始まる午後２時からかと思います。取材は10時からでも結構です。

２．場所　長崎自動車「城山記念会館」

【新聞発表資料ＮＯ４】

楽劇長崎今昔物語の上演について

平成10年12月９日

長崎ブリックホールのこけら落としの一環として、人間国宝 七世野村万蔵、五世野村万之丞、ほか長崎市民を含め総勢180名が出演する「楽劇長崎今昔物語」

が、いよいよ今週末の12月12日（土）に上演されます。

既に何度もご案内いたしてますが、今回の公演には、様々な団体のほかに長崎市民や県民などが、一般参加の形で出演しています。

楽しい、嬉しい、見ておいて良かった、ということになるものと事務局一同確信しています。

稽古スケジュールなどは、下記のような計画になっています。

是非、スケジュールなどを参考にして、取材にお越し下さい。

なお、公演当日のブリックホールへの入場は、添付しています「記者クラブ入場許可証」にてご入場下さい。

また、記者席は２階にご用意していますので、ご利用下さい。

浜　民夫

記

1．上演日時　平成10年12月12日（土）
　　開場　12：00
　　開演　13：00
（1）長崎見物　　上演時間　30～40分
　　休憩時間　20分
（2）長崎平和楽　上演時間　1時間

2．稽古スケジュール等

	万蔵	万之丞	長崎見物	長崎平和楽				マスコミ撮影取材
				一般市民	大村工業高校	十善寺龍踊	僑友会獅子踊	
１２／　９(水) １８～２１時	－	－	－	総稽古	総稽古	総稽古	総稽古	可
城山記念館								
１２／１０(木) １８～２１時	－	○	－	総稽古	総稽古	総稽古	総稽古	可
城山記念館								
１２／１１(金)								
１３～１６時	－	－	－	稽古	稽古	稽古	稽古	可
１６～１９時	○	○	総稽古	－	－	－	－	不可
１９～２１時	○	○	－	総稽古	総稽古	総稽古	総稽古	不可
ブリックホール・リハーサル室								
１２／１２(土)								
9時～10：15	○	○	リハーサル	－	－	－	－	可
10：15～11：50	○	○	－	リハーサル	リハーサル	リハーサル	リハーサル	可
13：00～15：00	○	○	本番	本番	本番	本番	本番	本番会場内
ブリックホール本舞台								不可

【資料ＮＯ５】　楽劇長崎今昔物語実行委員会組織図

１０／６／１０

「楽劇長崎今昔物語」実施体制

最高責任者・総監督

野村万之丞

（連絡調整担当）
平原さや子

実行委員会会長

松田白高一

（連絡担当）
太田広美

実行委員会

名誉会長　伊藤一長（長崎市長）
名誉顧問　野崎元治（長崎商工会議所会頭）
会　　長　松田白高一
副会長　安達健治（長崎商工会議所副会頭、安達社長）
副会長　平原さや子（長崎観世九皐会代表者）
委員　高比良　昇（長崎商工会議所専務理事）
委員　山本正治（長崎市役所観光課長）
委員　林　照雄（長崎新地中華街商店街振興組合会長）
委員　林　敏幸（長崎新地中華街商店街振興組合）
委員　村木営介（矢太楼社長）
委員　今倉正司（楽劇団）
委員　橋本勝利（ActJapan）
委員　野村史高（万の会）
事務局長　浜　民夫（長崎大学教授、よか研究会幹事）
事務次長　脇山信雄（長崎総合科学大学教授、よか研究会）
事務次長　太田広美（太田事務所社長、よか研事務局長）
会長補佐　湯地　勉（長崎自動車取締役秘書室長）

組織役割分担

実行委員会

評議委員会　議長　松田白高一
評議員　小川雄一郎（長崎新聞社社長）　（朝日新聞支局長）
（読売新聞支局長）　（毎日新聞支局長）　（西日本新聞支局長）
（日本経済新聞支局長）　（NHK 放送局長）　（NBC 社長）
（KTN 社長）　（NCC 社長）　片柳英司（NIB 社長）
（エフエム長崎社長）　小曽根吉郎（明清楽保存会会長）
松村純一（長崎海運支局長）　岩永正雄（JTB 長崎支店長）　井上啓子（長崎純心大学教授）

組織財政委員会

委員長　高比良　昇（長崎商工会議所専務理事）
副委員長　村木営介（矢太楼社長）
委員　山内繁樹（長崎コンベンション協会事務局長）
委員　山本正治（長崎市役所観光課長）
委員　保利武俊（長崎新聞社事業局長）
委員　横尾　眸（長崎新聞社事業部長）
委員　平原さや子
委員　林　照雄（長崎新地中華街商店街振興組合会長）
委員　陳　名治（四海楼社長）
委員　福地　敦（JTB 長崎支店営業課長）
委員
委員　浜　民夫（事務局長）
委員　脇山信雄（事務次長）
委員　太田広美（事務次長、会計担当）
委員　湯地　勉（会長補佐、総務担当）

演出・考証委員会

委員長　野村万之丞
副委員長　平原さや子
委員　原田博二（長崎市立博物館長）
委員　林　敏幸（長崎新地中華街商店街振興組合）
委員
事務局

制作委員会

委員長　今倉正司（楽劇団）
委員　大迫久友（楽劇団）

庶務・運営委員会

委員長　橋本勝利（Actjapan）
副委員長　平原さや子
委員　太田広美（事務次長）
事務局

市民参加推進委員会

委員長　野村史高（万の会）
委員　稲石丈志（万の会）
委員　○○○○（市民参加代表）
委員

楽劇長崎今昔物語実行委員会事務局　850-8501 長崎市新地町 3-17 長崎自動車(株)内　TEL/FAX ０９５－８２１－８９５６

【資料ＮＯ８】　楽劇長崎今昔物語「長崎平和楽」市民参加稽古日程

（１０／６／１０）

回	月　日	時　間	会　場	備　考
説明会	７月２０日(祝)	１５：３０～１７：００	ＮＢＣビデオホール	内容説明、参加候補者意思確認等
第１回	８月１６日(日)	１０：００～１６：００	長崎自動車「城山記念会館」095-862-0160	
第２回	８月３０日(日)	１０：００～１６：００	同上	
第３回	９月１９日(土)	１８：００～２１：００	同上	
第４回	１０月１０日(土)	１８：００～２１：００	同上	
第５回	１０月３１日(土)	１８：００～２１：００	同上	
第６回	１１月１５日(日)	１０：００～１６：００	同上	
第７回	１１月２２日(日)	１０：００～１６：００	同上	
第８回	１１月２８日(土)	１８：００～２１：００	同上	
第９回	１１月２９日(日)	１０：００～１６：００	同上	
第１０回	１２月　５日(土)	１８：００～２１：００	同上	
第１１回	１２月　６日(日)	１０：００～１６：００	同上	
第１２回	１２月　９日(水)	１８：００～２１：００	同上	
第１３回	１２月１０日(木)	１８：００～２１：００	同上	
第１４回 リハーサル	１２月１１日(金)	１３：００～２１：００	長崎ブリックホールリハーサル室	
第１５回 リハーサル	１２月１２日(土)	９：００～１２：００	長崎ブリックホール本舞台	
本番	１２月１２日(土)	１３：００～１５：２０	長崎ブリックホール本舞台	

浜　民夫

(1999年1月29日受理)